知ってるよ。ひなこ
Hinako
番外編
デビューコミックス
DC「知ってるよ。」大好評発売中！
明日の休み
どこ行こっか？
星崎
コン
明日は…
あ――っ
なー
2人ともっ！
？
明日ヒマ!?
試写会
当たったんだけど
行かね!?
俺らこどもー
当たっちゃって
さ！
映画かぁ…
話題作らしーぜ

ダリア文庫
ぜんぶ、猫のせい～木蘭町の謎解き事件簿～番外編

ラブレター

by 和泉 桂

「チカ、郵便が届いてた」
同居人の庚育真（かのえいくま）に茶封筒を渡され、買い物から帰った五十嵐知可（いがらしともよし）は目を丸くする。
この頃は育真と二人で買い出しに行くことも多いが、今日は育真の飼い猫であるちびの定期検診とかで、別行動を取った。育真の膝の上で眠る灰色の猫はちび、足許にいる虎模様の猫はとらで、それぞれかなり太めなうえに老齢だ。育真が二匹の健康を気遣うのも無理なかった。
「何だろう、これ」
B5のコピー用紙に出力された文面は、数字がずらりと並んでいる。文字は一つもなく、読むことは不可能だ。それを一瞥した育真は「暗号だな」とあっさり答えた。
「暗号？」
育真の家政婦をする傍ら、漫画原作者を志す知可は、最近ではよくミステリを読むが、素養はまったくない。
封筒に差出人の名はなく、消印も近所のもので、どこから届いたのかも不明だった。
「暗号っていうのは、受取人と差出人が共通する『鍵』を持っていないと解読できない。鍵がない場合は、この暗号がどういうパターンを持つか調べる必要がある」
「うん、それで？」
「だが、この場合は調べるまでもないな」
「え？　これが読めるの？」
端整な顔立ちの美形のくせに、育真は猫が心配すぎて引きこもっていた経歴を持つ。そんな育真の仕事は探偵で、これまでにいくつかの事件を解決しているが、見ただけでわかるのは早すぎないか。
「簡単だ。打ち出された数字は、1から7までで、どれも二桁だろ」
確かに、数列には8と9が欠如している。
「数字は、表を作れっていうヒントだ。こうやって、縦と横のマスにそれぞれ1から7まで振って、縦と横の数字がぶつかる位置にある文字を示してるんだ」
「でも、七×七は四十九だからひらがなは入らないよね。アルファベットだとものすごく余るし……何を入れるの？」
「五十音は無理だが、その数で納まるのは、『いろは』だ」
「でも、いろはって四十七……だよ」
「それに『ん』を加えて四十八だ」
育真は手近にあった紙に、さらさらと表を書きつけた。
「縦と横に、それぞれ1から7までの数字を振る。いろはを書き込んで……こうだ」
11のマスに『い』、12のマスに『ろ』……まるでパズルみたいで面白い。
「ええと……くかつなのか……九月七日午後六時。夕陽丘（ゆうひがおか）……かな？」
濁点を補うと、すんなり意味が通じた。夕陽丘はこの木蘭町（もくれんちょう）にある高台の公園で、天気のいい日は街を一望できるので知られているが、知可はまだ訪れたことはない。
「すごいね、育真」
「種を明かすと、これは謙信（けんしん）の暗号とも言われる有名なものなんだ」
「一目でわかるなんてすごいよ。あさって、ここに行ってみる？」
「行くしかないだろ。これは挑戦状だ」
クールに見えて負けず嫌いの育真は、ふんと鼻を鳴らした。
二日後の六時。勢い込んで二人で公園に

[あらすじ] 警視庁勤めの父からの頼みで家政婦のバイトを始めた知可。家主の育真は“引きこもり”の探偵で猫だけを可愛がる残念な男で…!?